

インカ・トレール・デスパシオ
(ホセさんとカルメン、インカ道に行く)

‘07年 11月



インカ帝国というのは南米にあったということくらいは知っていた。だがそれはエジプト文明やチグリスユーフラテス文明と同系列のものくらいにしか考えていなかった。

ペルーには2度目の訪れとなる。2年半前に首都リマの北に位置するブランカ山群へ行った。このときはまだ1度も行ってない南米へ行ってみたいということで、南米でありさえすればどこでも良かった。秀峰アルパマヨやワスカランなどを見ても自分の力で登れるレベルではないので、感動して写真を撮りまくっている人に対してシラケタ感じさえ持った。

リマへは前回も今回もアトランタ経由である。成田～アトランタが往12時間・還14時間で、さらにアトランタ～リマが6時間、これにトランジェットの時間が2時間以上含まれるので往復の時間を考えるだけでうんざりする。そんなに長時間の飛行のはずなのに、成田を15時30分に出てリマに着いたのは23時くらいであった。たったの7時間30分？何だこりゃ。

1. 参加メンバー

たいていは日本の各都市から乗り継ぎ都市まで各々行って全員集合となるのであるが、今回は全員が成田に集まりそろってアトランタまで行く。セキュリティチェックの厳しいアメリカへの対応か。成田に集まったのはジイサン3人、バアサン8人の合計11人。それにアルパインツアーのイケメン・リーダー、30歳の初々しい松井章さんが付く。彼は大学時代にはスペイン語を専攻し、何回もの南米一人旅行の経験を持つというので頼もしい。

アトランタの飛行場でトランジェットの間を使って自己紹介を行う。いつものように皆さんかなりの海外登山経験者だ。私も負けまいと、“海外登山は19回目です。”と言ってしまった。大人気ない。この旅行中ズーと私と同室になった柏さんは、聞かれることには答えるが自分からこんなにすごいんだぞというような言い方はしない。今年71歳ということであるが、年の差以上に違いを感じる。

2. クスコ

リマに着いたのは深夜であつたのに翌日はもう5時起きでクスコへ移動する。クスコはインカ帝国の首都であつたということで、さっそくサクサイワマン遺跡などの見学となる。この日から現地のガイドとしてワシントンが紹介される。彼の所属はその名もコンドル観光といういかにも南米らしい名の旅行会社であり、これ以後マチュピチュまで同行して行動上のリーダーを勤めるといふ。巨大な岩を組み合わせた遺跡をいくつか見て回る。きっちりと計算されて整然と並べられた巨岩は、間にカミソリの歯が入る隙間もないといわれても納得ができるほどである。



No1 サクサイワマン遺跡

クスコの街はすでに3360mの高さであるので、今夜の宿泊は2900mのウルバンバ谷まで降りて高度順応を図ると松井さんから説明される。今回登る最頂部のワルミワニユスカ

峠は4198mであるので高山病対策も慎重に行わなければならない。昼食に入ったレストランでは親子らしいバンドが入ってわれわれの傍でフォルクローレと思える音楽を演奏してくれる。(ペルーの音楽はすべてフォルクローレとされているので全部フォルクローレであったのかどうかは当てにならない)終わるとCDを売りつけられる。みんな買っていたので私もつられて買う。



No 2 クスコの町中心街

3. インカ・トレール・トレッキングの開始

この日からいよいよトレッキング開始である。しかしまだインカ・トレールの開始地点まで2時間余りバスで移動しなければならない。バスに乗り込むと最前列の席で可愛い女の子が迎えてくれる。色は浅黒いがスペイン系の血が混ざっていることを思わせる健康的な顔立ちだ。バスがスタートすると松井さんから“彼女は学生で、マチュピチュまでこのトレッキング中ワシントンのアシスタントとしてわれわれに同行します。”と紹介された。そして彼女の名はナント“カルメン”。ジジババ軍団に1輪の花が添えられた。

初日の行程は休憩を含んで6時間であるが、高低差は300mしかないのでまあ足慣らしというところか。クスコとマチュピチュのふもとにあるアグアス・カリエンテスをつなぐ鉄道線路の途中が出発点である。線路を横切ったところにインカ・トレールの入口関所がある。ここで入山手続きを行う。ペルーではホテルに泊まる時もパスポートの提示を求められるが、この入山手続きの際も求められた。カルメンがパスポート



No 3 クスコからマチュピチュへ方面向かう鉄道

トに記念スタンプを押してくれる。2000年に入手した10年ものパスポートのページ数も少なくなっているため、パスポートにスタンプを押されることはありがたいようなあ

りがたくなような。2000年に私は大腸がん摘出の手術を行っている。このパスポートを取ったときに手術を執刀した先生に、“このパスポートの期限が切れるまでは生きさせてくださいね”言ったことをふと思い出す。7割方消化したのだから、たかがパスポートのページの残量なんかどうでもいいはずだが。これが『徒然草』であつたら、“とかく小人というものは目先の小事のために本当に大切なことを見逃しがちなものである。”なんて吉田兼好に書かれてしまいそうだ。

スタートポイントにある看板の写真を撮ろうとしていると、後ろから“シャシントリマ ショウカ”というおかしなイントネーションの声がかかる。振り返るとカルメンがニコニコと立っている。“日本語しゃべれるの?”と聞くと“スコシ”と答える。こいつはいいや。

私は大勢での山歩きるときはなるべく後ろのほうを歩く。前を歩くほうが楽なのであるが、後ろは人の歩きに煩わされることが少なく済む。先頭はワシントンが歩き、ラストはカルメン。松井さんは全員の行動を把握するために、その時々に応じてポジションを変える。したがって私の位置はカルメンのすぐ前ということになり、願ってもない位置取りとなった。

スペイン語で let's go は～と言い、ゆっくりはエスパシオだ

と教えられた。帰国後、『ゆっくり』をインターネットのスペイン語辞書で当たったら **despacio** と出ていたので、この文の表題もインカ・トレール・デスパシオとしよう。(後で松井さんに確認した) 道々には南国らしくサボテンがたくさんあり、きれいな花を付けている。“このサボテンはなんていう名前?”とカルメンに聞くと、“カクタス”と答える。“こっちは?”と聞いても答えは“カクタス”である。さらに別のサボテンの名を聞くとついにギブアップして、“日本語ダメ”と言った。そんなら英語で行こう。俺だって定年になった2年前は英語学校の **student** やってたんよ。



No 4 出発点の関所付近と看板



No 5 サボテンいろいろ

昨日も雨に降られたが、この日も降ってきた。首都リマの年間降雨量は 10mm であるという。ちなみに東京は 1 500mm である。だからペルー全体が雨なんか降らないものだと思ってしまった。来る前にインターネットの『Google・Earth』という衛星写真のソフトでペルーのこの地方を見たら、けっこう雲が写っていたので“リマとは違うのだな”とは考えていたのであるが、2 年半前のブランカ山群でも一度も降られなかったのが許してしまった。雨の中でしょぼくれて昼食なんていやだなと思っていたら、昼食時にも食堂テントを張ってくれたので助かった。それ以降の行程でも昼食はいつも食堂テント内であった。

鉄道も走り主線であるウルバンバ川沿いの道から支流のクシチャカ川沿いの道に入る。この分岐点からはヤクパタパ遺跡を見下ろせる。ワシントンがみんなを集めてインカ文明の説明をしてくれる。インカ文明は 1 300 年代にほんの 100 年ほど栄えたものであるという。日本でいえば室町時代あたりといったところか。エジプト文明と同年代なんてとんでもない。地面にウルバンバ川を真ん中にした左右 3 本の川を描き、マチュピチュやアマゾンの熱帯樹林帯などをプロットして、スペイン人から攻められたインカ人がどのようにしてマチュピチュを守ったなどということを説明してくれる。インカ人はこの地点でクシチャカ川沿いの道を塞いで、ウルバンバ川側にスペイン人の注意を逸らしてマチュピチュを守ったのであるという。まるで社会科の野外授業風景である。



No 6 ヤクパタパの遺跡

この日の行程は比較的楽なはずであったが愛川さんにとっては厳しかったみたいである。ワイヤバンパ・キャンプ場が近づいてきたのに足が重い。次第にみんなから遅れ始める。昨日のクスコ観光のときからすでに体調は悪かったみたいで、真っ青な顔をして高山病の影響かとも思わされた。愛川さんと私とカルメンがみんなから取り残されて歩く形になるが、カルメンと連れ立って歩けるので遅れることなんてどうでもいい。

私はいつも海外の山歩きをするときは電子辞書を持ち歩くが、たいていはザックの中にしまえばなしである。しかし今回は、いつしか電子辞書はザックの中からズボンのポケットに移されて、カルメンとの会話の中で大活躍をしていた。前日の松井さんの紹介では学生ということであったが、聞いてみるとすでに卒業してインカ・トレールのガイドが本職であるという。ついつい多くの男が聞きたがる場所に話していく。

“How old are you?” (歳はいくつ?) “25” “Really? I thought you are teenager.”

(本当?ティーンエイジャーかと思っていたよ) “Do you have boyfriend?” (ボーイフレンドは?) “Non, I don't have” (いないわ) 本当かよ、と思うがまああまり追求しない。カルメンが遅れている愛川さんを指差して、彼女のザックを持ってやろうかというゼスチャーをする。“Oh, no. She is OK.” (彼女は大丈夫だよ) 私は勝手にそう決めてしまった。こんなところで人に頼る癖を付けてしまうと後が続かない。地球の裏側まで山登りに来るくらいであるのだから、このくらいは歩けるはずだ。“頑張れ”という励ましの言葉をかけることもしない。山登りは所詮自分の足で歩かなければならない。ばてたときは頑張らざるを得ない。そういう立場にいる人に、さらに“頑張れ”なんて言ったって、耳障りになることはあっても元気にさせる効果なんてあり得ない。他の人達は、私が彼女のことを気遣って付いて歩いてあげていると思っていたようであるが、まあこんな風に突き放して見ていて、ただカルメンとの会話を楽しんでいただけである。愛川さんにとっては、俺がカルメンと話している声のほうがよっぽど耳障りであったかもしれない。

そんなことをしているうちにもとにかくこの日のキャンプサイトであるワイヤバンパに着いた。到着したわれわれを、ポータ達が民族衣装に着飾って拍手で迎えてくれる。こんな習慣はヒマラヤでも見かけない。しかしインディオで構成されたポータ達の顔はなんとなく固いように感じる。ヒマラヤ



No 7 ワイヤバンパ・キャンプ場

のポータなんて、ニコッと笑顔を向けると笑い返してくるのが普通であるが、彼らはスペインに滅ぼされたインカの怨念から抜け出せないのか、などといったは大げさか。

テントは基本的には2人にひとつで、食堂テントやトイレテントもヒマラヤなどのトレッキングと同様に設置されている。トイレに至ってはなんと携帯水洗トイレである。こんな始めて見る。排出された便も持ち帰って自然破壊への配慮をしていると説明された。本当にそこまでやっているのかは疑問であるというのは松井さんの弁である。富士山はゴミやトイレ処理の問題で世界遺産には認められないということであるが、マチュピチュは世界遺産の優等生か。



No 8 携帯水洗トイレ

4. ワルミワニユスカ峠



No 9 ポータやスタッフの紹介(右はキッチンスタッフ・右端がカルメン)

この日の行程は今回のトレッキングで一番きつい日である。4 198m のワルミワニユスカ峠まで 1 200m 登ってから次のキャンプサイトまで 500m 下る。松井さんは 8 時間の行程であると言ったが、昨日の皆の歩き方を見ているともっとかかるであろうと思われる。しかし出発時刻は 8 時半が目標であるというから遅い。朝食が早めに終わったので 8 時には出られそうかなと思っていると、ポータ達が正装をして並んでいる。ワシントンがおもむろに 23 人のスタッフの名前・年齢・家族構成まで紹介し始めた。さすがに全員の詳細まで覚えているわけではないようで、最後のほうはワシントンが紹介を行う前に各自が彼にささやいて情報注入を行っていた。南米人気質を良く知り抜いている松井さんは急かそうとする様子もない。結局スタートできたのは 8 時半を過ぎていた。これがペルー流というやつなのだろう。

昨日はサボテンをいっぱい見たが、高度を上げたためかサボテンの領域は終わったようで花が多くなってきた。ここは今、春から夏に至る時期であるから花も多いのか。普段はあまり花に関心を示さない私も、日本では見られないようなきれいな派手さを持った花を見ると、さすがに立ち止まる。

ワルミワニユスカ峠への指



No 10 きつい登りの中の花

導表も見かける。『WARMIWANUSCA ABRA』と書いてあるので、カルメンに“Is ABRA pass?” (ABRA って言うのは峠のことか) と聞くと、“Yes, you are intelligent man.” と誉められちゃった。

この日は大津さんの体調が悪いようだ。私と同じように後ろのほうを歩くことが好きみたいで、大体私の前を歩くことが多かったが次第に遅れ始めた。彼女は 3 月にインドのシッキム地方のヒマラヤ、6 月に韓国の漢拏 (ハンラ) 山に登ったということで、今年の海外登山では私と同じ軌跡をたどっている。さらに 8 月にもどこか海外の山へ行ったらと話していた。本来ならこの程度のところでばてるようなことはないであろうが、昨日の寝不足が堪えているようだ。そのことをぼやいているので、“『寝られなかった』と思っても、人は案外寝ているものだ、とよく言われますよ。” と慰めてあげるが、こんなことでは何の慰めにもならなかったようだ。昨日の愛川さんのときはさしたる登りでもなかったので何とか持ちこたえたが、この日の登りはけっこう勾配もきついので厳しい。時々立ち止まるようになる。お天気の神様も意地悪く雨の鞭で疲れた身体に追い討ちをかけてきた。何とか昼食のユウチャパンパまでたどり着いたが、ワルミワニユスカ峠までさらに 500m の登りが残っている。昼食のときに隣り合わせた松井さんに、“大津さんは厳しそうだから、荷物は誰かに持たせたほうがいいですよ” と伝えた。松井さんは肯いて大津さんに話に行った。

このように厳しい日でもワシントンは昼食時間をたっぷり 1 時間 30 分とった。状況にあわせてペースを調整するという考えはないようだ。昼食時でもキッチンテントを張ったりしているので時間をとってしまうのは致し方ない。これすなわち南米流ということか。

次のスタートのときに大津さんは自分の荷物を背負っていた。松井さんの進言を拒否したのであろう。大休止をとったのでしばらくは皆に付いていたがすぐに遅れ始めた。この調子であと 500m の登りはきついので、大津さんに言う。“荷物はカルメンに持たせましょう。” 彼女は素直に従った。このような時は相談調で話すのではなく、断定的に言ったほうがいい。



No 11 ワルミワニユスカ峠とオッパイ山

こんなときでもカルメンとのお話は切らさずに続けた。お父さんはすでに無く、お母さんと 32 歳のお兄さん、そして 20 歳の弟と暮らしていること。カルメンはクスコの大学の観光学科を卒業して今の職業についたこと。大学生の弟はカルメンと同じ道をたどり日本語を専攻していることなどを聞き出した。“外国へ行ったことがあるか?” と聞くと、チリ

とコロンビアに行ったことがあるという。南米内だけだ。“他にはどこへ行きたい？”と聞くと、ローマとブルガリアという答えであった。お世辞でも JAPAN という答えが聞きたかったが、そういった心遣いはないようだ。ワルミワニユスカ峠は見えているのであるがそう簡単にはたどり着かない。峠の右側にあるおっぱいの形をした山を指差して、“It’s a like you.”と言ったが、“What’s?”と言われて通じなかった。そのほうが良かった。日本のオヤジの恥の輸出はかろうじて防げた。

次の休みのときにワシントンが遅れているわれわれのところまで戻ってきて、背中に自分のザック、胸のほうに大津さんのザックを抱えているカルメンを見て、“Oh, you are super woman.”と言いながら大津さんの荷物を受け取った。このときからカルメンが先頭、ワシントンがラストになった。カルメンがトップに行ってしまったからといって付いていってしまうほどの恥知らずにはなれないので、そのままの位置を保つ。大津さんの足取りはますます重くなった。ついに胃の中の物を戻してしまった。でもこの方が楽になるはずである。このときの彼女の反応がいかにもこの人らしい。“道を汚してしまっ！”と言う。“大丈夫ですよ。雨が流してくれます。”自律の精神の強い人なのであろう。

カルメンの場合は大津さんに“シンコキュー”などと言って、息を吐くときには鼻のところに手を持っていったりしてケアーをしてくれたが、ワシントンは時々大津さんに“YOU OK?”と声をかけるだけだ。真剣に聞くので大きな眼と顔がおっかなく見える。私は相変わらず“頑張れ！”のひとつも言わないのであるが、まあ日本語のわかる人間が側にいるだけでも少しは役に立つだろうといった程度である。ワルミワニユスカ峠まで標高差で100mを切ったころさらに足取りは重くなった。先に峠にたどり着いている皆の顔が識別できる距離のところまで来ているのに、立ち止まることが多くなったのでついに声をかける。“頑張りましょう。もう皆の顔が見えていますよ。”もしかしたらモウロウとして何も見えていないのかもしれない。でも何とかワルミワニユスカ峠に着くことができた。あとは下りだけだ、何とかなるだろう。

峠では前日ばてていた愛川さんに平塚さんや熱田さんが“良かったねー、今日は元気で”と自分のことのように喜んでいる。気のいい人達だ。山では良くあることで、一人がばてると今までばてていた人も元気を取り戻してしまう。しかし雨を含んだ空には夕暮れが忍び込んできた。今度は日没との戦いだ。私はこの日大失敗をしていた。いつもはたとえ2時間程度



No 12 ワルミワニユスカ峠

のハイキングでも懐中電灯を持っていくのであるが、この日はポータに預ける荷物の中に入れてしまったのである。下りに入って元気を取り戻したかに見えた大津さんであるが、やはり皆より遅れがちである。キャンプサイトは見えてはいるがまだはるか遠くだ。雨は一段と強くなり稲光も加わった。なんとか日没前に着けないものかと思ったが甘かった。暗くなり始めると日没はすぐに来た。ポータが心配して迎えに来てくれた。その数が一人から4人5人と増えていった。ワシントンが大津さんに向かって、彼らにおぶらせようかとのゼスチャーをするが、大津さんはきっぱりと断った。彼らが前後から懐中電灯の光を照らしてくれる。大津さんが“私、懐中電灯持っていますから出します”と言うのを、“もうすぐだからこのまま行きましょう”と制した。この日初めてリズムカルに歩けるようになったのに、その歩調を崩したくなかった。私にも焦りが出ていたのかもしれない。雨にぬれた石畳に足を滑らせて派手に転んでしまった。振り返ったワシントンに見られてしまい、“Pain?”(傷んでないかい)と同情されてしまった。(冗談じゃねえヨ。この程度のことで)でもあとで冷静に考えると、案外俺もぼてていたようだ。それでもなんとかキャンプサイトのパカマヨに着いて、これで今回のトレッキング中で1番きついところは通り過ぎた。キッチンテントに先着していた皆が温かく迎ええくれた。大津さんは休むためにすぐにテントへ向かったが、他の人たちは案外元気だ。お茶に続いて夕食までにぎやかにすごした。熱田さんはサプリメントマニアである。昨日の愛川さんにも、今日の大津さんにも“これが効きますよ”と盛んに供給していた。今回のオバサンたちは熊野さんを除いて、皆主婦か元主婦らしい。父ちゃん働く係り、母ちゃん海外旅行の係り。何かにつけて遅しい。オットおちよくっちゃいけないな。“ジャーあんたは何だっていうのよ”と追及されたらおっかないもんな。口にチャック。

5. インカ・トレールの意味

この日はまずルンクラカイ峠まで300mほど登り返す。しかしもう全体としては下りペースであるので余裕が出てきて変わった花にも目が向けられる。花というものはきれいに咲くことによって蝶や昆虫を引き付けて花粉を運んでもらうと教えてもらったが、こんな小さな花でも引き付けられる昆虫なんているのかなと思わ



No 13 お花いろいろ

せられるような花もある。そんな花に対しても駿河さんは必ず写真を撮る。どんな小さな花でもえこひいきしないで平等に扱う。ご主人は静岡で配管などの販売の事業を行って

るという。20 人余りの人を使っているので、駿河さんも普段は経理・総務の仕事を一手に引き受けていて、今回のトレッキングに参加するのも出発前日まで悩んだという。決して父ちゃんだけ働かせて、のうのうと海外旅行を楽しんでいるわけではなさそうだ。私の前職がビルなどの空調設備技術者であり、配管を扱うのも仕事のひとつであったので話が合った。

またカルメンがラストの位置に戻ってきたので楽しい 1 日が始まった。“高橋さん、後ろばかり歩かせてすいませんね。” 皆がからかいの意味を込めて言う。カルメンが、日本人同士で何を話しているのだろうかという怪訝な顔をしているので、“My position is always the front of Carmen” (俺の位置は常にカルメンの前だよ) と言うと、皆もカルメンも納得した。

峠の直前にルンクラカイ遺跡がある。インカ時代は飛脚が活躍したらしく、その中継所と見張り場所であつたらしい。こんな山奥にどうやってこの大きな石を運び込んだのであろうと感心する。カルメンとのツーショット写真をワシントンに撮ってもらおう。このニッコニコの顔、普段気難しそうな顔をして仕事をしている俺からは想像もつくまい。日本で働い



No 14 ルンクラカイ遺跡



No 15 カルメンとツーショット

ている皆さん、しっかり仕事をしろよ！。オジサンは楽しんでるのだ。

2時間も歩くとサヤクマルカ遺跡に出会った。「何だ、また遺跡かよ。」と思いつつ、日常生活では反省という言葉を知らないこの俺に反省の気持ちが芽生えてきた。今回のトレッキングの目的って、この遺跡めぐりだったんじゃないか。出発点で配られた地図を改めて見直して確かに何かが違うこと



No 16 サヤクマルカ遺跡

を確認する。メキシコのトルーカでは、トルーカ山の登山とティオティワカンなどの遺跡見物は分離していた。ネパールなどのトレッキングも、山岳民族の生活道を歩くときと寺院などの見学とは完全に分離している。ここではインカ人が生活道として使った石畳の道を歩き、彼らが生活した石の家や要塞をたどっているのである。出発点から歩き出してしばらくは石畳ではなかったのに、今歩いているところにはすべて石畳が敷き詰められている。どこからこうなっていたのか定かには覚えていない。旅行というものは計画をした時



No 17 インカ・トレールの遺跡プロット

点で楽しみの 7 割は終わっているなどという人も
いる。ツアー会社のスケジュールに乗っているだ
けで、旗の下に付いていけばいいんだという安易
さが見るべきところを見逃させてしまっているの
であろう。反省!!と言いつつ石畳の道でカルメンと
のツーショット。やっぱり旅は楽しまなくちゃ。

昼食時に“ずいぶんカルメンと仲がいいね”と
からかわれているとき、ワシントンが言った。“カ
ルメンの相手だからおまえはホセだ。”これ以後彼
らは私をホセと呼ぶようになった。カルメンは食
事の際にはウェイターの手伝いもする。スープを
配るときなどに私に手渡ししながら“ハイ、ホセさん”
と言って渡す。行動中も、休憩時間からスタート
するときには“イキマショウ、ホセさん”と例の
おかしいイントネーションで声をかける。“ホセは
最後にはカルメンを殺すことになるんだぞ。”とナ



No 18 石畳の道でツーショット

イフを突き立てる格好をしてやると、“オペラのカルメンは知っているわ。以前お客さんから聞いたことがある”と言った。カルメンには日本語もよく教えてあげた。『tired』は『ツカレタ』、『take care』は『キオツケテ』など。『hungry』は『ハラヘッタ』と教えたが、よからぬ意図を感じ取ったか乗ってこなかった。感心なことにこまめにメモ帳に書き取っていた。彼女は私を“**He is a good teacher**”とワシントンに言って誉めてくれた。

この日のキャンプサイトはプルタマルカ遺跡の近くである。今までは見張台や要塞が主目的と思える遺跡ばかりであったが、プルタマルカはだいぶ形が違う。どう見ても段々畑

である。さっそくカルメンに質問しようと思うが畑という単語が出てこない。『field』では大げさすぎてこの狭い段々畑とマッチしない。“**What is that?**”と遺跡のほうを指差した後で適切な『畑』の単語を辞書で調べていると、何を聞きたいのか察したらしく“**That is ファルマリング**”と言う。“**What's ファルマリング**”と言うと、私の辞書を取り上げて『**farming**』の項を開いて見せ



No 19 プルタカマルカ遺跡

た。「ファーマリング」と言われれば察しがついたかもしれないが、と思う。一般に彼らは、『ー』は『る』と発音する。『インポータント』は『インポルタント』になる。

この夜夕食時に、松井さんからショッキングな伝達があった。“カルメンは次の仕事があるので明日アグアス・カリエンテスに着いたらお別れになります。”なーんだ、クスコまで付き合ってくれないのか。さらに彼はもう一言余計なことを付け加えた。“そしてクスコに住むフィアンセの元に帰ります。”これで今回の寅さん映画の恋物語も終わりか。



6. 続・インカ・トレール

この日の朝食はキャンプサイトの裏にある小高い丘の上でとりましょうと松井さんから提案された。秀峰ベロニカ山やサルカントアイ山に見下ろされての朝食である。すぐその裏山と言われたが、登るとけっこうフウフウいってしまった。しかし食事を運び上げたのはポータ達でありぜいたくを言うてはいけない。鮮やかな山が現れたり、時々雲が出たりして、それはそれなりに幻想的な雰囲気をかもし出した。ごく薄い色ではあったがブロッケン現象も見ることができた。外国で見たのは初めてである。



No 20 山上の朝食

今夜泊まるアグアス・カリエンテスはロッジであるのでポータ達と顔を合わせるのはこの朝までであるということで、お別れのセレモニーを行った。ポータ達が



No 21 お別れダンスの乱舞シーン

いっせいにわれわれのグループの女性達の手をとってダンスを始めた。いつも硬い表情しか見せないと思っていたインディオ達が、さすがにこのときだけはにこやかな顔になった。こっちが彼らの素顔であるのに違いない。彼らの部落にいるときはいつもこのような顔をしているのであろう。

スタート時間になるとカルメンが“How are you?”(元気?)と声をかけてきた。“I am sad.”(俺は哀しいよ)“Why?”(なぜ)“At last evening dinner, Akira told us. Carmen will finish for this trekking by tomorrow. And she return to the breast of her fiancé in Cusco.”(昨日の夕食のとき、松井さんがカルメンは明日で終わりです。そしてクスコに住むフィアンセの元に帰ります、と言ったよ。)“Non, I don't have boyfriend.”(私にはボーイフレンドなんていないわよ)“I don't believe your sounds because you are so beautiful.”(信じらんないよ。だって君はそんなにきれいなんだから)“Non”もう一度彼女は強く否定した。その勢いに押し切られて“Akira said a lie sometimes. He said ,Carmen is a student before.”(アキラは時々うそをつく。この前もカルメンは学生だって言っていた。)と松井さんを悪者にしてその場の雰囲気を変えた。まあお互いの幸せのためにカルメンの言う通りにしておこう。今回の寅さん映画には続編がありそうだ。石畳のインカ道がピンク色に輝いてきた。

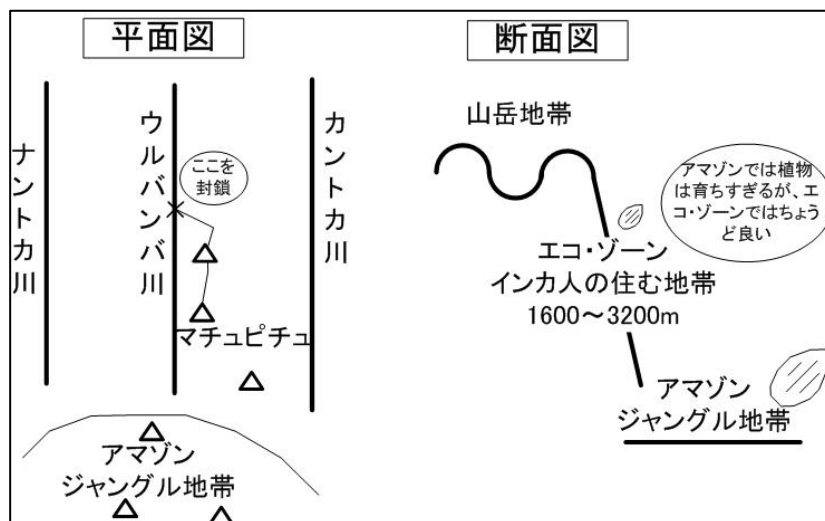
今日の最初の遺跡はプユタカマルカである。石垣で構成された段々畑を行く。ワシントンがストックで地面に絵を書いてインカ帝国の歴史と文化の説明をしてくれる。平面図に断面図も加えてインカ文化を説く。“この地域は大きな3本の川に囲まれている。スペイン人はクスコからウルバンバ川沿いに侵入した。彼らはアマゾン



No 22 プユタカマルカでの授業風景

のジャングル地帯にある都市の黄金が目的であったので、塞がれたマチュピチュへの道に気がつかなかった。だからマチュピチュはスペイン人による破壊から守られた。”さらに断面図のほうからは“これらの段々畑のある遺跡は山岳地帯とアマゾンのジャングル地帯の

中間の高さにあり、気候も温暖であるので植物は適切な大きさに育つ。そしてこれらの段々畑はすべて東向きに位置している。(北半球であれば西向きに相当)”と説明してくれる。この畑では主にコカが栽培された。そのほかにポテトやとうもろこしも作られたと云う。ここでちょっと疑問を



No23 インカ文明の説明

持つ。一般に原始的な人間というものはすべて食うものを得るために努力したり戦ったりする。コカの栽培が主であったというのは本当だろうか。コカってコカインに通ずる嗜好品だろう。そんなものが主産業に成り得るのだろうか。ちなみにコカ飴は日本に持ち帰れるがコカ茶は麻薬として扱われて持ち帰れない。松井さんを通じてワシントンに質問した。彼の答えは“インカ人はハイレベルな人達であった。”エジプトやメキシコのピラミッドを作った民族が夏至や冬至の太陽の角度を計算したと同様にインカにもこのような技術があり、太陽の位置を計測して農作業の指標にしたとのことである。これらのことをワシントンはエコ・システムと呼んだ。前にも書いたが私はビルなどの空調設備技術者であり、その中でもエネルギー消費に関することを専門としており、エコロジーは毎日取り組んでいるテーマである。まさかインカの真っ只中でエコを聞かされるとは思わなかった。後日、ワシントンに一応確認した。“エコという言葉はエコロジーのことを言ったのか？それはCO₂削減などのことを意味しているのか？”彼は Yes と答えた。ここでインテリの香り漂う大津さんがポロリと洩らした。“でもインカは文字を持たなかったのよね。”へーそうなんか。じゃあ一昨日見たルンクラカイ遺跡の飛脚の中継所っていうのは何なんだ。日本で飛脚っていうと手紙を運んだんじゃないのか、手紙を運ばない飛脚なんてあるんかい、疑問。そういえば遺跡の中にはエジプトで見られる文字や壁画に相当するようなものはなかった。

また雨が降り出した。カルメンに言う。“It rains everyday without yesterday.”(昨日以外は毎日雨だね) 彼女は薄いぺらぺらのビニール製ポンチョを着ている。裾を腰のところで縛り上げているのでこけし人形のような格好だ。ワシントンも同様のポンチョしか持っていない。“Do you have a rainwear?”(レインウェアは持っていないのか)と聞くと、ペルーでは売っていないので、手に入れようと思ったら旅行者から売ってもらうしかないらしい。“そんなら俺のをあげるよ。でも俺は明日もう1日マチュピチュが残っているから、

トレッキングが終わったらワシントンに預けておくからもらおうといい。”ちょうど買い換えようと思っていたところなので気前よくあげることとする。オジサン、もてようと思ったらこれくらいのことしなくっちゃ。“この旅行にはどのくらいお金がかかったのか”とカルメンが聞く。“6 000 ドルくらいかなあ”と答える。特に驚いたようなようすはなかったが、後日ペルーに関する本を読んでいたらペルー人の平均年収は 1 200 ドルと書いてあった。彼女の年収はそれより多いだろうが、やはりたいした金額なのだろう。

柏さんの体調が悪いようだ。2 日前あたりから下痢みたいで、夜中もしょっちゅうトイレへ行っていた。この日は休憩時間になるとへたり込んでしまっている。でもこの人はガタイがでかいので何とか遅れずに付いている。例によって熱田さんが愛用のサプリメントを勧めている。サプリメントに絶対の信頼を置いているらしい。

ウイニャワイニャ遺跡はルートからちょっと外れているので、昼食後に散歩感覚で寄る。上から見下ろす感じで遺跡が広がっている。ほとんど段々畑である。マチュピチュを東京にたとえると、宇都宮あたりの近郊農村地帯といった役割だったのであろうか。ここで自由時間が設けられたので段々畑の下の方にある居住区まで下りてみる。細かく仕切られた部屋の壁に張り付くようにきれいな花が咲いていた。わがグループの女性達とパチリ。今回けっこう持てるな～。ここに居たのはなぜか皆主婦だった。亭主ども、母ちゃんはインカで楽しんでいるから、日本でしっかり働けよ。



No 24 ウイニャワイニャ遺跡

ワシントンに、カルメンにあげるといったレインウエ

アの件を断っておく。“明日マチュピチュが終わったら君に預けるからカルメンに渡してくれ。”俺の英語で伝えられたかどうかと思ったら、“それじゃあ明日クスコのホテルにカルメンにとりに行かせるよ。”とカルメンのほうを向いて顎をしゃくりあげて同意を求めた。

カルメンも OK した。望むところじゃないか。これで明日もう一度カルメンに会える。

いよいよインティプンク（インカの言葉で『太陽の門』という意味）に着く。マチュピチュへの正門とされている。ペルーでは太陽が他の国々にも増して崇められている。通貨の単位も太陽を意味する SOL である。マチュピチュから見ると、この位置あたりから太陽が登るのでその名がついたのであろう。インカ語で、インティが太陽で、プンクが門くらいかなと思ってカルメンに聞くが、こんな高度な内容を伝えられるほど私の英語力は上等にできていない。カルメンが私の電子辞書を取り上げて、『gate』の項を開いて見せた。“バカにすんじゃないヨ、I learned the 『Gate』 in my elementary school.”（『Gate』なんて小学校で習ったヨ）と言ったが、

彼女は私が何に腹を立てているのか理解できないらしくきょとんとしていた。カルメンが階段の上に駆け上がり門の後ろに隠れた。ワシントンが一人ずつ階段の上に立たせて、その人のカメラでインカ道の完歩の証明をする写真を撮ってあげる。撮り終わった人が門の向うに消える前にカルメンが **Congratulations**（おめでとう）の意味を込めて握手をしてくれる。最後に私の番になり、当然のごとくカルメンを呼び寄せて何回目かのツーショット。普段モテたことのないやつをつけ上がらせるときりがない。門の向こう側に回ると前方下にマチュピチュが展開されている。今まで通過してきた遺跡とは規模が違う。マチュピチュだけを見に来た観光客の中にも『太陽の門』まで足を伸ばして、眼下のマチュピチュを楽しんでいる人も多くてかなりの賑わいだ。マチュピチュの後方に控えるワイナピチュ山の鋭



No 25 『太陽の門』でツーショット



No 26 マチュピチュと後方がワイナピチュ山

い岩肌に、本当に明日あんなところに登るのかとちょっとビビる。この日はマチュピチュを上から見下ろすだけとして、一旦バスでアグアス・カリエンテスの街まで下りてロッジ泊まりとなる。テント生活から離れると、旅行も終わりに近付いたなという感が強くなる。

アグアス・カリエンテスの街はマチュピチュ観光だけで成り立っている街である。ほとんどの観光客はここで泊まる。クスコ行きの列車の線路が街の中心を横切り、マチュピチュとの間をピストン輸送するバスもひっきりなしに走る。それにも増して人の数が多い。

ロッジのフロントでカルメンとパソコンのメルアドを教えあう。ここまでは抜かりなかったのだが・・・。

7. マチュピチュ

5時半にホテルを出てバスで再びマチュピチュへ向かう。混雑を避けるために朝早いうちにマチュピチュ見物を済ませて、その後ワイナピチュ山へ登ろうという計画である。

マチュピチュの内部に入るとワシントンが皆を集めていつもの野外授業である。ここでは地面に線を引いても監視員から怒られるのでストックを川に見立てて説明をする。それでも監視員が覗き込んで一言文句を言っていた。どこにでもいるんだよね、このタイプ。

ネタが一緒なのだから話の内容は今までのものと重複している部分が多かったが、ここにはインカ文化の高度さを証明するあらゆるサンプルがあるので説得力が違う。ワシントンの説明も、単に歴史の踏襲ではなくエコロジーに代表されるように科学的である。ハイラム・ビンガムというアメリカ人の探検家が1911年に偶然マチュピチュを発見したという話は有名なところであるが、この一事だけがマチュピチュ発見のすべてではないと、インカの血を引くからこそという見解も加える。以前私も日本のテレビで『インカ人が滅亡した8割は疫病が原因であった』と解説してい



No 27 マチュピチュ内部アラカルト1

るのを聞いたことがあったが、彼はこれに対しても異論をさしはさむ。まあこの辺になると私にも理解ができなかったので、詳しく知りたければインカへ行ってワシントンの講義を受けて欲しい。

船橋さんはワシントンの説明にいつも大きくうなずいて聞いている。スペイン語風アクセントの英語が良くわかるなあ后感心してしまう。“よくわかりますね”と声をかけると“いえ、解ってないですよ”と言うが、松井さんの通訳には耳を傾けていないので、ワシントンの英語の説明を理解している風に見える。松井さんはスペイン語には堪能であるので、かなりはしょった意識になる。あまり短かったので本当に全部訳しているのかな、と思うときさえある。

マチュピチュ見学が一通り終わるとワイナピチュへの登山だ。入口にはゲートがある。名前と年齢を自筆で書かなければ通してくれない。私の前で愛川さんが手続きをしている。失礼ながらチラッと歳の項を見てビックリ。68と書いてある。(本当?) 顔なんかもつやつやしているので10歳以上若いと思っていた。本当の歳を知っていたらトレッキングの初日に彼女がばてていたときの対応は違ったものになっていたろう。ゴメンネ、でも若く見られたのだから勘弁してよ。

われわれの後ろを修道女の服を着た二人の尼さんが来た。一人は携帯電話をかけながら歩いている。修道服・山登り・携帯電話、ぜんぜんそぐわない。どうせ日本語がわかるわけではないから揶揄をこめて“尼さんでも山登りをするのか。”と言うと、大津さんからぴしゃりと言われた。“あれは尼さんではありません、シスターです。”“あれ! キリスト教では尼さんて言わないの?” “まあ尼僧とは言いますけどね。”と少しは譲歩してくれた。(テヤンデー、西洋かぶれしやがって。ハムレットにだって『尼寺へ行け』って言うせりふがあるよ。) 後で得意の電子辞書を使って確



No 28 マチュピチュ内部アラカルト2

認した。『Sister』《カト》修道女・尼僧・シスターとある。『アマ』とは書いていない。念のために国語辞典も引く。こういうことが簡単にできるところが電子辞書の強みである。『尼』（梵語の *amba* の俗語形の音写）と最初に出ている。なんだ、これじゃあ仏教用語以外に適用なんてできないじゃないか。大津さんの見解が全面的に正しいわけだ。オソレイリマシタ、ニャロメ。

昨日、『太陽の門』から見てかなり厳しい登りであると認識していたので急坂は計算のうちであり、特に苦しいという感情を持たないで頂上に着けた。いつもの俺は急な岩場ではビビってしまってケツが引けるのであるが、この日は急なところもスイスイ歩けた。しかし登りでは急坂を意識しなくても歩けるが、下りではそうは行かない。順調に歩いているうちはいいが、前が詰まって待たされると余計なことを考えてしまう。

マチュピチュまで戻ってゲートを出る前に感動的な出会いがあった。ハチドリが以前テレビで見たそのままの姿で木に咲いている花の蜜をついばんでいる。ワシントンはハミング・バードと呼んでいたが、この鳥の名前としてその呼び方も悪くはない。カメラを取り出そうか、このまま見続けようか、

ちょっと迷ったが見続けるほうを選んだ。カメラに視線を奪われている間に飛んで行かれちゃったら何にもならない。

マチュピチュは毎年2月から3ヶ月間をメンテナンス期間としてクローズすると聞いた。これに比べるとやはり富士山のケアはまだテキトーすぎるのか。日本的な『まあそう固いことはいわずに』という考えは戒めないといけないなあ。

これでインカ・トレールの行程はすべて終わった。ゲート脇の食堂に入るとたくさんの



No 29 ワイナピチュ山頂



No 30 ワイナピチュ山の急な下り

観光客で溢れ返っている。日本人もけっこう多い。みんなマチュピチュだけを見に来た人達であるので、5日も歩いてきたという一目おかれる。こちらも、ただいいとこ取りの観光をしている人とは違うよと、偉そうな気持ちを抱いてしまう。いやな性格であるとも思うが、彼らと私達の得たものを比較してみればそれだけの違いはあるはずだ。

枚方さんご夫妻は二人でよく海外旅行に行くみたいだ。旦那はカメラマニアで、気に入った被写体を見つけるとフラフラッとそちらへ行ってしまう。奥さんは常に見張っているようで、自分の目の届く範囲から出そうになると呼び止める。“お父さん！”で気がつかないときは“おじいさん！”になり、さらに気がつかないと“じいさん!!”になる。食堂でだんながりんごの皮むきをしている。今では炊事のほとんどを旦那が担当しているという。かなり厚めにりんごの皮をむいているが、奥さんはいちいち口を挟まない。普通女の人は自分流と違うやり方の家事をする人を許容しないものであるが、この奥さんはそういったことに対して鷹揚なようだ。奥さんの手のひらの上で、孫悟空の旦那はのびのびと跳ね回っている。駿河さんがうらやんで、“うちの旦那ともあんなふう在海外旅行をやりたいなあ。”と言うので、“そうしたいんだったら早く分かれて次を見つけるんだね。”と失礼なことを言ってしまった。事業経営者の駿河さんのご主人にはまた違った魅力があるはずで、そこに惚れたんだろ。あれもこれもって欲張るなよ。

バスでアグアス・カリエンテスの街へ降りて、みやげ物屋漁りでただの観光客の仲間入りをする。海外登山ではいつもTシャツを買うので、家の箆笥の中に有り余っており、今回は買うまいと思っていたが、インカ・トレールの地図の入ったTシャツなどを見てしまうとなついで買ってしまふ。

平塚さんは典型的な日本人観光客スタイルでみやげ物を買って捲る。SOLの持ち合わせがないと言うので、たくさん残っていた私の分を両替してあげた。でも彼女は山好きが高じて、休暇のとりやすい会社への職業替えまでしたことがあるという。今でも山岳会に所属して雪山もこなすというから筋金入りで、タダのミーチャン・バーチャンではない。

クスコに戻る列車は、天井近くまで透明ガラスで作られて思いっきり観光客サイドに立った構造である。秀峰ペロニカが良く見える。低い



No 31 列車内部と車内のファッションショウ

位置から見ると、山の上で見たベロニカとはまた別の良さがある。1両毎に男女2人車掌がついている。彼らが、この地方特産のアルパカ（らくだの一種でリヤマの親戚）の毛皮で作られた製品を着て、車内でファッションショーをやってくれたりする。列車はクスコの町の美しい夜景を窓の外に映しながら、スイッチバックを繰り返して終着駅に到着した。

ホテルに着くとワシントンはさっさと自宅へ帰ってしまった。カルメンはどういう形で訪ねてくるかな、もしかしたら来ないのかな、いやワシントンが連絡を付けてくれてわれわれの到着時間に合わせてきてくれるはずだ、などと気を揉んでいると松井さんと一緒にホテルのロビーにやってきた。タウンウェアに身を包んだカルメンはあまりにも美しく、用意していた英語のフレーズは全く口から外へ出ようとせず、最後のツーショットに収まることが精一杯であった。他のおばさん達も争ってきれいに変身したカルメンとのツー

ショットに収まった。山の中ではお互いに苦労して通じない英語の会話を成立させていたが、ここでは側に松井さんがいたので、会話は彼の通訳を通じて行われた。きれいなカルメンは俺には遠かった。“レインウェア忘れないでね”とそれを指差した後、

“It is already late at night. キオツケテクダサイ”（もう夜は遅い）に山で彼女に教えてあげた日本語をオチャラケタように付け加えて別れの挨拶としてしまった。背筋を伸ばして颯爽とした歩き方でカルメンはホテルのロビーから出て行った。



No 32 タウンウェアに包まれたカルメン

7. ナスカの地上絵

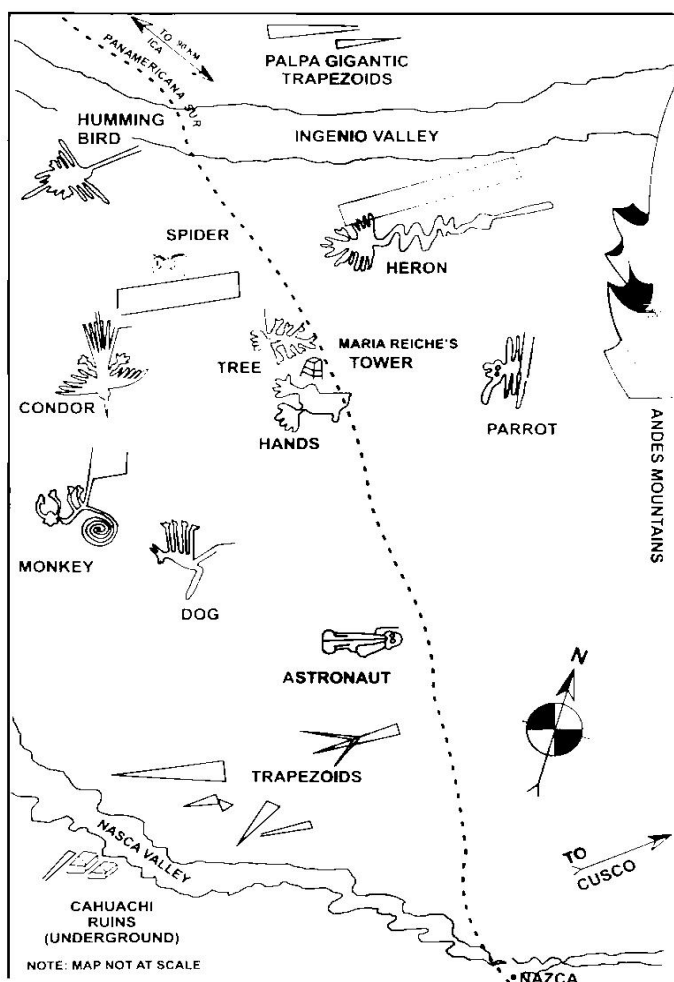
インカ文明が 1 300 年代に栄えたのに対してナスカの文明は 100~600 年であるので、相互の関係はまったくない。しかし距離的に近いので観光コースとしては一緒に扱われることが多い。近いといっても直線距離で 300km あるので、クスコから一旦空路リマへ戻り、翌日また空路を使ってナスカ見学の拠点であるイカに着いた。ナスカの地上絵見学はリマから日帰りとする観光が多いみたいで、われわれも日帰りであった。リマ~イカ間の飛行機には 50 人以上の人が乗っていたと思うが、地上絵見学用飛行機の定員は 10 人程度であるので、待ち時間の間にイカの砂漠の中にあるオアシスや博物館を見て時間調整をする。

ナスカの博物館を見学すると、織物や土器などが陳列されており、それなりに文化程度が高かった様子を伺わせる。

飛行機の時間待ちをしていると新宮さんが“一緒に写真に写ってもらっていいですか？”と隣に座って、パチリと撮ってもらった。そんなときの仕種には『初々しい』という表現すら当てはまる。名前を呼ばれたときなど、軽くぴょんと飛び跳ねてから駆け寄っていく。昨日まで中学生だったの



No33 ナスカの地上絵を見る飛行機



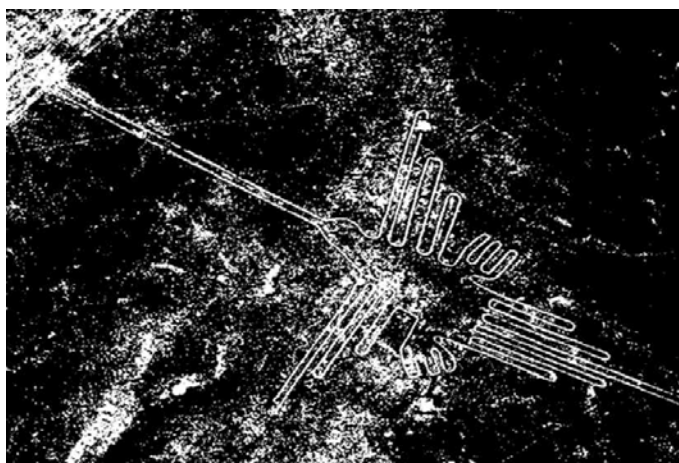
No34 地上絵の地図

にある朝起きたら年齢が 30 歳加算されていた、といった感じのする人だ。現在は独身であり、最近勤めていた会社を辞めたので退職金が続く限り海外登山をやるといっている。け

っこう楽天的だ。けれども高齢のお母さんと一緒に住んでいるので、あまり長い旅行はできないという。人はそれぞれいろいろな事情を内包しているのだなあ。

クスコの列車は天井までガラス張りにして景色を見やすくしていたので、地上絵を見るナスカの飛行機は床がガラス張りになっているのかと思ったが、航空機製造技術はそこまで進歩していなかった。飛行機内の座席構成は左右1座席ずつで、ローリングしながら左右の客に地上絵を見せるというやり方である。地上絵は有名なハチドリやサルなどがほぼひとつの地域にまとまって書かれている。ほとんどは平面にあるが、宇宙人などは山の斜面に描かれている。現在発見されているものがすべてではなく、その後も順次発見されており、その中には日本人によって発見された地上絵もあるらしい。ハチドリなどひとつの絵に対して、左の客が見やすいように斜めの旋回を行うと次には右の客が見やすいように逆の斜め旋回を行う。目が回ってしまう。駿河さんはこれで完全に参ってしまい、地上絵を見るどころではなかったといていた。日本人観光客もかなり多いらしく、説明役の副操縦士（多分？）は日本語で、“ミギシタ、ハチドリ”などと紹介する。日本のテレビで紹介されたような絵は一通り見ることができたようだ。私のカメラでもなんとなく写っている。この写真は私のカメラで捉えたものを、パソコンソフトを使って画像処理したものである。本物はこんなにコントラストが強く見えるわけではない。

地上絵はこのように飛行機で見ることだけが許される。この場所に立ち入るなんていうことはできない。仮にもしできたとしても、広すぎてなんだかわからないであろう。ナスカの地上絵については、なぜこのようなものを作ったのか、どのような技法が用いられたのであるのか、ほとんど解っていない。それは現在のところ学者や夢想家、あるいはその



No35 ハチドリ（ハミング・バード）



No36 クモ

両方の要素をもった人の世界である。博物館で見たこの地域の織物や土器類を含めてはまり込んだら抜け出せなくなるような内容があるようで、そこまでやる気のない人には日帰り旅行で飛行機の旋回に眼を回していることが似合っている、そんな観光地である。

8. カルメン、その後

日本に帰ってから、当然のようにカルメンにメールを書いた。しかし返事はない。3回出したが梨のツブテだ。海外だからといってメールが届かないなんていうことはない。今までだってメキシコやネパールのガイド達と何回もメールの遣り取りは行っている。南半球には電波が行かないなんていうことも考えられない。アドレスが間違っているのであれば戻ってくるはずであるが、それもない。アグアス・カリエンテスでは、カルメンがホテルのフロントからメモ用紙をもらってきて、俺にメルアドを書くことを要求したのだが。

寂しいな。“I am sad.”

こんなとき寅さんだったらもう次のお祭りに行って、商売の口上に精を出していることだろう。“見上げたもんだヨ、屋根屋のフンドシ。粋な姉ちゃん、立ちション便。オッ、そこのお嬢ちゃん、どうこの万年筆。表通りの一流デパートへ行けば5000円はする品物だ。今日は特別に2000円。ナニ、高いだと、そんじゃあ1700円、1300円、え〜い面倒くせェ、もうヤケッパチだ、清水の舞台から飛び降りたつもりで1000円。持ってケ、ドロボー。”

